

弥七田古窯跡試掘調査

弥七田織部の焼かれた歴史

市は、織部焼で名高い「弥七田織部」の焼かれた窯・弥七田古窯を調査しました。
今回明らかになった窯跡や焼物にまつわる歴史を知って
身近な人たちにも話してみませんか。

問合先 文化財課

● 今回の調査の内容を教えてください
長 今回の調査では、窯本体の場所、構造などを調べました。調査により弥七田織部を焼いた窯の性格が分かれば、国史跡の指定に近づきます。



調査の様子

● 弥七田古窯はどんな窯なのでしょう
長 県史跡・大萱古窯跡群の1つで、17世紀前半の連房式登窯と考えら

れてきました。また、弥七田織部と呼ばれる織部のブランド品を焼いた窯としても知られています。



● 弥七田織部とは、どんな焼物ですか
長 弥七田古窯で焼かれた織部の特別な名称です。絵筆の運びや緑釉のたらしかけに大きな特徴があります。また、精巧で薄作りの器体に、赤や



茶の色彩を効果的に用いて文様を描いています。

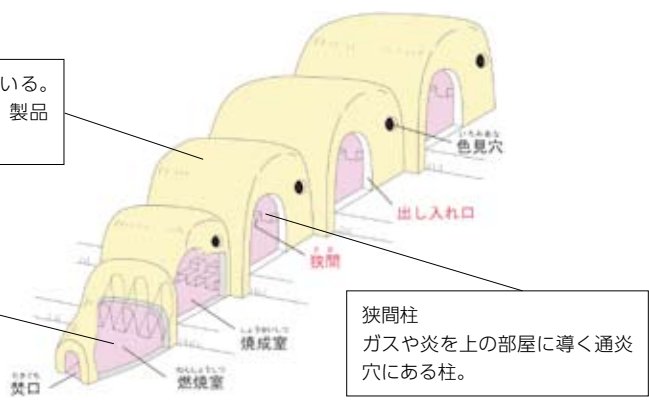
● 弥七田織部は誰が使っていたのでしょうか
長 武士階級よりも一部の商人層に好まれ、愛蔵されていたと考えられています。全国でも城館跡ではほとんど出土せず、京都など一部に限られています。

● 調査でどんなものが見つかりましたか
長 連房式登窯の窯本体を2基（1号、2号）確認しました。共同窯（一族や同業者などが共同で管理する窯）だったと考えられています。

● 2つの窯を併用していたのでしょうか
長 いいえ。最初は1号窯が使われていて、1号窯が使われなくなった後、2号窯造ったと考えられます。同じ場所に、すぐに新しい窯を造り

連房式登窯とは

朝鮮から唐津に技術が伝わり、土岐の元屋敷古窯で最初に築かれます。その後、美濃や尾張（瀬戸）に広まったと考えられています。



複数の部屋がつながっている。部屋ごとに出入口があり、製品を出し入れできる。

燃焼室でおこされた炎は、部屋の境の下方に開けられた穴を通り、部屋を順番に伝わっていく。

狭間柱
ガスや炎を上部屋に導く通気穴にある柱。

替えるのは珍しい事例です。器を焼く際に必要な施設がそろっていたり、1号窯の跡地の傾斜が新しい窯を作るのに利用しやすいなど、良い条件がそろっていたのではないのでしょうか。
1号窯の跡は2号窯に覆われていたため、良好な状態で残っていました。このため、出土遺物や柱（狭間柱）の構造について、たくさん発見がありました。

● 他の窯と違っている点がありましたか

長 円形と四角形の2種類の柱が使われていることが挙げられます。狭間柱は、歴史的には円形から四角形に移行していくのですが、今回のように形の違う柱が混在している構造は、他に例がありません。元屋敷古窯（土岐市）以降、各地で様々な構造の窯に発展していくのですが、その模範の時期に当たる窯だと考えられます。



円形の柱



四角形の柱

● こういったものが焼かれていたのでしょうか

長 鉄釉や長石釉の碗の破片が多く出土しました。2種類のうわぐすりをかけるなど、ひと手間かけた高級志向の製品が多いという印象です。また、出土した遺物から「M」「千」の窯記号が見つかりました。先に牟田洞古窯跡、窯下古窯跡で出土したものと共通する記号で、同じ集団が関わっていたと考えられます。



出土遺物に見られる窯記号（左は「M」、右は「千」）。

うわぐすりを2度かけて焼いています。この工程により、多彩な色合いを表現しています。

● 窯の周辺で、陶工たちが生活していたのでしょうか

長 元屋敷跡（生活する場所）や工房跡（陶

● 今後の予定について教えてください

長 柱の形をはじめ、弥七田古窯は同時期の窯跡とは異なる構造をしています。このため構造の全体像が推定しづらく、各部屋の出入口の位置、煙出し部分の構造、全体の形など不明な点が多く残っています。今後の追加調査によってこれらの点が明らかにになれば、窯や焼物の発展の過程が分かってくるかもしれません。いつか、当時の陶工が、この弥七田古窯を介して可児市とどのように関わっていたのか分かるような発見があるといいですね。

市は、牟田洞古窯跡、窯下古窯跡とともに大萱古窯跡群として来年度以降の国史跡指定を目指し、出土した遺物の整理や報告書作成を進めていきます。

織部とは

織部は古田織部の意匠を反映した焼物と言われており、土岐市の元屋敷古窯で初めて焼かれたと考えられています。織部はそれ以前の焼物と異なり、さまざまな形、絵柄や釉薬などの多彩な色彩をもった焼物です。

博多の商人である神谷宗湛^{かみや そうたん}の茶会記の中で、ヒツミがみられる茶碗を「ヘウゲモノ（ひょうきんなもの）」と表現しており、これは織部焼と考えられています。

織部は技法などにより青織部、赤織部、鳴海織部などがあります。焼かれたのは江戸時代ですが、安土桃山文化の影響を色濃く受けた焼物と思われます。古田織部の没後、織部焼は姿を消したため、焼かれた期間はわずか20年程度でした。



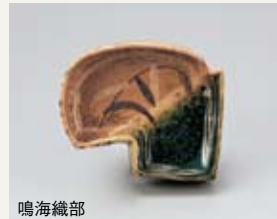
文様を描く部分のみ銅緑釉をかけないようにし、文様部分に長石釉をかけ分けています。



鉄釉をかけ、作為的に歪ませています。窓（側面の釉をかけない部分）を空け、文様を描いたりします。



赤土を用いて、白泥と鉄釉で文様を描いています。



型を使って作られており、赤土と白土を用いています。



美濃桃山陶の種類と変遷

華やかな国産陶器が登場します。



鉄釉を全体にかけ、焼いている最中に引き出して急冷させた茶碗です。



草木の灰などを使用した釉薬をかけています。緑の釉薬を部分的に用いたり、線刻で絵を描いたりします。

筆で絵を描き、形に「ユガミ」「ヒツミ」がみられるなど、作為的な意匠が多くみられるようになります。



長石を使用した釉薬をかけた日本初の白い焼物です。筆で下絵を初めて描きました。



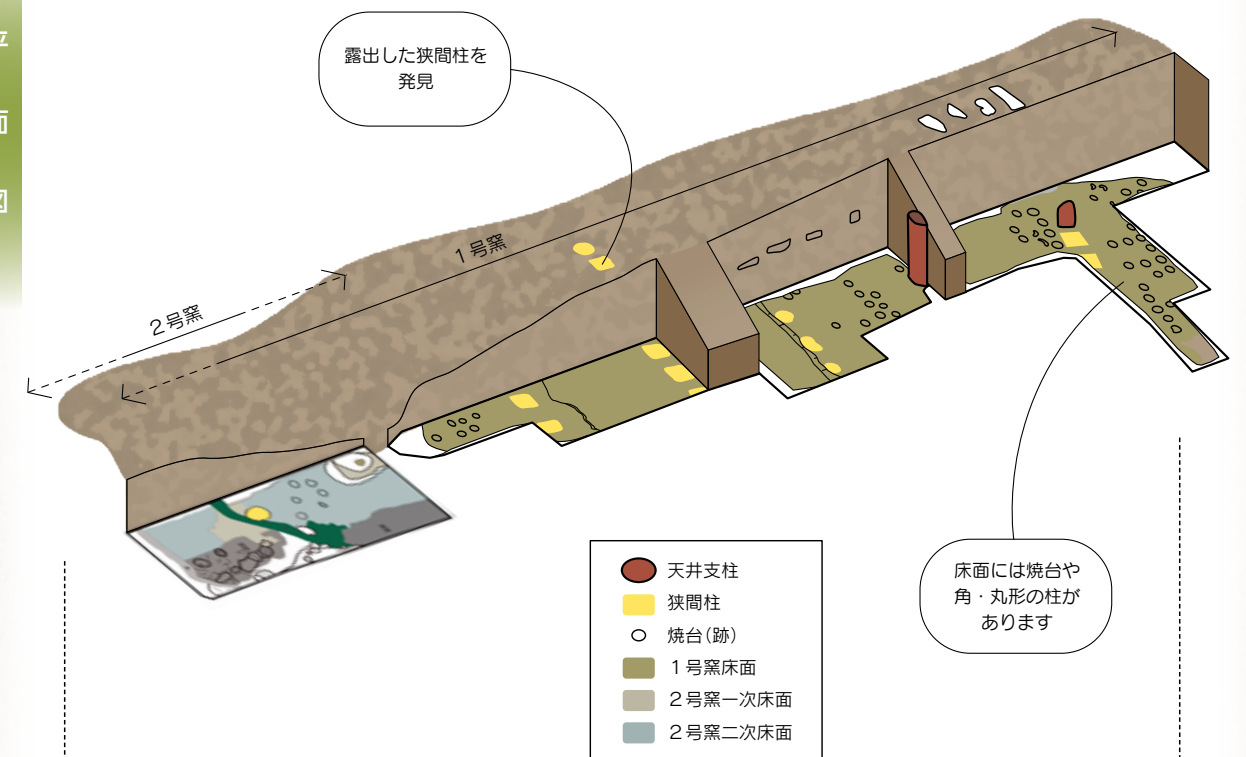
複数の釉薬のかけ分けにより、多彩な文様を表現しています。型を使うことで四角い器を作れるようになったほか、量産も可能になりました。

今回掲載した焼物の一部は、可児郷土歴史館で見ることができます。

弥七田古窯跡

400年前の窯を見てみよう

平面図



断面図

